

## 第10回



アメリカITまわりの話題

コラム

# Steve Deering博士の「引退」

NTTコミュニケーションズ

慶應義塾大学SFC研究所

宮川 晋 [miyakawa@nttmcl.com](mailto:miyakawa@nttmcl.com)

先日、IETFのIPv6関係複数のメーリングリストに衝撃的なメールが流れました。流した張本人は、IPv6 WG co-chairにして、IPv6の生みの親（のひとり）、Cisco Systems社のDr. Steve Deering.

曰く「飛行機とメーリングリストの世界からしばらくはなれ、好きなことに専念しようと思う。会社は親切にも1年間の長期休暇（Sabbatical）ということにしてくれたが、今後の予定は未定です」云々。

先日、9月の第3週にシリコンバレーのウィンドリバー社で行われたv6ops WGのInterimミーティングには出席していた彼ですが、確かに普段と様子は違いましたし、IPv6 WGおよびv6ops WG両方のco-chairをしているMargaret Wassermanさんも「なんかSteveは元気がない（tired）」と心配していたりして、今思い起こせば、ああ、そういうことだったのかと思うことしきり。一方で、個人的なメーリングリスト上では「ついにやった！（I did it!）」と書いてよこしてきました。とりあえず「Congratulations!」とお祝いのメッセージを送った私ですが、いかにも感慨深い思いにとらわれましたので、今回は彼の「引退」について書いてみたいと思います。

まずもって、なによりも最初に感心してしまったのは、個人としての彼が、すでに一線から離れても問題ないという経済状態にある、ということです。日本では、あまり見聞しない事態です。思い起こせば、去年の夏にシリコンバレーはPalo Alto市のCalifornia St.にある、Alain Durand氏お勧めのフランス料理屋さんにお昼どきにさりげなく別の理由で呼び出して、Alain夫妻やBob Hinden夫妻、そしてもちろんSteveの奥様、それに私事で恐縮ですがそのときにはまだ存命であった私の亡き妻江都子たちとともに、サプライジングパーティーでお誕生日をお祝いしたのですが、KAMEプロ

ジェクトの皆さんと相談して作った亀のキャラクターをあしらったお祝いのカードを手渡した私に対し、「50歳になるというので気がふさいでいたのだけど、だいぶ気分が良くなったよ。どうもありがとう」などとおっしゃっていましたから、Deering博士、当年まだまだ働き盛りの51歳ということになります。そのお歳で引退できるのだから素晴らしいことです。才能のある人間に対して、経済的な意味でのきちんとした報酬が払われている、ということの良い例証でしょう。なにもものすごく豪勢なわけではありませんが、十分に品のある、落ち着いた暮らしを自由に過ごすことができる。うらやましい限りです。

そう考えて、お祝いをしたのは確かに事実なのですが、さて、一方で、同時に私個人は不思議な思いにとらわれていました。確かにシリコンバレー近辺では、特にITバブル時代、ストックオプションを握ってIPOで大儲け、というわけで、若くして悠々自適の投資家稼業に転進、という方は結構いらっしゃったわけですし、ぜんぜんおかしくないじゃない？という方もいるでしょう。アメリカってというのはそういうのが普通の国だと。でも私が思ったのは、Deering博士は技術畑の人間であるのになぜ「引退」したいんだろう？！ということなのです。同じIPv6業界の中でもBob Fink博士をたとえば見てみましょう。すでにローレンスバークレー研究所からは引退をなさり、しかもご本人からお聞きしたところ曰く、Tahoe湖の方にすでに別荘を建てて悠々自適。しかしながら、6boneの運用管理からはご引退なさる感じはしません。すなわち、「趣味」あるいは、「ボランティア」として、別の言葉でいえば、自分の「本当の仕事」として、技術開発に貢献しているように見えるのです。

あるいは、たとえば、私がいままでお会いした中でも特に強く印象を受けた方で申し上げれば、Donald Knuth先生も然り。我らが日本でも、たとえば、まさに本誌の編集長でいらっしゃる和田先生もIJの研究所長としてますますご活躍。ほんの若造の私から仰ぎ見れば、もうこれは一種の「贅沢」とさえいえそうです。

すなわち、私にとって、優秀な研究者あるいはエンジニアは、たとえ引退できるだけの資力があっても、引退などしないものなのではないかと思っていたのです。だって、本質的に好きなことをして、身を立てている職業のはずなのだから。しかし、Deering博士は身を引いてしまいました。

ご本人は数年前から、IETFにおける「政治」にほとんど疲れていた、ということは私も知っています。IETFが終ったあと、シリコンバレーの山の中のハイキングコースで「どうして、あんな技術仕様にゴーサインを出したんですか。普段からおっしゃっていることから推察すると、お嫌いなはずなのに、どうして？」と半ばつかかかると聞く私に「確かに個人としては君のいうとおり、あれはとても嫌いなんだが、会場みんながそれがいいというのであれば、議長としては、もちろん尊重せざるを得ない。僕は自分の意見をすべて述べているわけではないんだよ」といったようなことを、さらっとおっしゃられたことがあります。確かにIETFは純粋な研究発表の場ではない。どちらかという営利企業同士の権限争いの場でもあります。そういう環境の中で、自ら創り上げた技術を世界に広めるという活動を主導的な立場で何年間にもわたって続けてこられるなかで、いろいろと本心では面倒だな、と思うようなことも沢山引き受けられてきたのは容易に想像できます。「本来のやりたいことではない」と思われたのも無理からぬことなのかもしれません。しかしながら、工学というのは本質的にそういう側面を持つものだと思いますし、「机上の空論」よりも現実に動いているテクノロジーが称揚されるのはあたりまえだと思うわけで、単に論文を書いてよしとするのではなく、現実に物を動かすことがどれだけ大切なことをよく分かっている我々は大変だとは思いますが、嫌だとは思いません。ですから、どうしてもそれだけが理由であるとも思えないのです。

Steveからのメールには、「しばらくの間、飛行機とメーリングリストから離れて、好きなことに専念する」というようなくだりがあります。飛行機というのは、インターネットの標準化や技術開発に携わっている方々には、あちらこちらと飛び回らないといけないという方も数多く、いきおいみな飛行機の機中で過ごすこと

が多くなるものです。たとえばシリコンバレーではサンフランシスコ国際空港をハブの1つとするUnited Airlineの最高級ステータス1Kプレミアなんて、珍しくもありません。だからそういう表現をなさったのでしょう。メーリングリストはまさに政治の象徴。本質的な研究に没頭するためには、雑音も多いメーリングリストからは脱退した方が確かに集中できるというものです。

ですから、私の「希望」としては、来年、また、「どうだ。ほら。こんなすごいことを思いついたよ」というメッセージが聞けるというのであれば、とてもうれしいな、と思いますし、はたまた、「十分休んだので、また戦線に復帰するからよろしくね」というのも、心強いお話です。なによりも口うるさい方の多いIPv6の標準化のフィールドを、その人柄でまとめあげていたのはDeering博士なので、それを失うのはみんな本当に不安に思っているのですから。

というわけで、彼の本心はどこなのか、1年後にまったく新しいアイデアとともに研究開発のフィールドに復活してくれるのか、あるいは、また我々と一緒にバリバリとIPv6を推進してくれるのか、はたまた、本当にこういう世界から真の意味で「引退」してしまうのか。もちろんご本人だけがご存知だとは思いますが、適当なタイミングでぜひお聞きしてみたい。「いまのままでもいいのか」「もっと違う人生の選択肢もあったのではないかと日々自問自答することが多い私たちにとって、自分の将来のあり方を考えるときに、きっと参考になると思うのです。

いずれにせよ、ともかくもDeering博士が「自由」を掴んだことは間違いがありません。特に日本に戻ってきてからというもの、我が身を振り返ってみても、また、まわりを見渡してみても、なかなか彼が掴んだような「自由」を手に行っている人は、そう多くはありません。そもそも「自由」になろうなどとは夢にも思わない、というようなタイプの方にも数多く出会います。それはそもそも「志」の問題なのか、あるいは、そもそも経済的な問題が重くのしかかっている、そういうことを考えること自体に対し、まったく現実感が持てないのか。アメリカのITの周辺を構成する数多くの研究者・エンジニアたちとの差を、あらためて強く感じる事件となりました。

(平成14年11月8日受付)